第 132 号特集号　原稿募集

特集テーマ「〈暴力〉と教育哲学」

2025 年 11 月刊行予定の『教育哲学研究』第 132 号において編集委員会は、「〈暴力〉と教育哲学」をテーマとする特集を組むことにいたしました。

私たちの世界はますます〈暴力〉に満ちているように見えます。いまこの時も、どこかで多くの人びとが戦争、紛争、内戦、内乱に巻き込まれています。こうした物理的暴力の要因・背景にはつねにすでにさまざまなレベルにおける所有の格差、宗教・宗派間、民族間、性別などの差異を差別として構成する構造的暴力と象徴的暴力が存在ないしは潜在しています。これらさまざまな〈暴力〉を社会問題として告発し、広く人びとに周知し、民主的な社会を構築する一助となるはずのマス・メディアにおいても、マス・メディアの権力性を批判してより公正な社会構築への希望を芽吹き得るはずのソーシャル・メディアにおいても、過激な、時に根拠すらない言説的暴力が人びとを深く傷つけ、しばしば死に追いやるという事態が生じています。グローバル化、クロス・カルチュラル、クロス・スピーシーズが唱えられる今日では、もしかしたら、私たちが学術的な活動や日常生活のなかで当たり前のものとして何気なく用いている言葉による事分けや名指し、身体のあり様や感じ方がすでに、誰かや何かの生を窮屈で不自由なものにする〈暴力〉を含んでいるかもしれません。

教育（学）ももちろんこれらの〈暴力〉と無関係ではありません。教育への権利を有する子ども、その権利を保障する親や教師の日々の暮らしにおいても、さまざまな「二極化」や「階層化」が生じて（いるとされて）おり、極の一方、あるいはより「低い」とされる階層に配置された人びとを暴力的な状況に曝しています。「親ガチャ」という言葉や反出生主義の思想が人口に膾炙するのも、教育に何ら可能性も希望も見出せないと人びとに思わせてしまうような何らかの不条理な〈暴力〉が働いているからかもしれません。従来、教育（学）は子どもを〈暴力〉に触れさせまいと懸命に努めてきましたが、一方で、Schwarze Pädagogik や M. フーコーが指摘したように、そもそも教育自体に、愛や教育的配慮、子どもの自由などの名目の下に、子どもや学習者を抑圧・放置するという〈暴力〉が内包されているともいえます。つまり、〈暴力〉は、教育の根本的な原理に内在する問題でもあるのです。

こうした〈暴力〉に教育哲学研究はいかに取り組んできたでしょうか。『教育哲学研究』第 92 号（2005 年刊行）では「戦争と教育哲学」という特集が組まれています。その趣旨文には「『教育哲学研究』の掲載論文に「平和」や「戦争」といったテーマで掲載された論文はほとんどない」と書かれています。それから 20 年、戦争体験者の減少や震災等への関心の高まりから、戦争や災害を主題とする論考は増えてきていますが、上述のような教育領域内外の構造的暴力、象徴的暴力、言説的暴力を主題とする論考は、散見されはするものの、議論が尽くされているといえるほど十分であるとはまだいえません。

〈暴力〉が教育（哲）学研究の主題となりにくい要因として、第 92 号の趣旨文でも指摘

されているように、「極めて論争的」で、かつ論者の「政治的な立場が前面に押し出される」ことが指摘されます。100 号記念特別号（2009 年刊行）の第 10 章でも、『教育哲学研究』で論じられてこなかったテーマとして「政治」が挙げられています。この課題に対して、私たちはこの間、「政治」を主題として論じる言葉と論理、自らの政治的ポジショナリティを省察する視点とその視点を反映する学術的アプローチとを鍛え上げてきました。『教育哲学研究』が〈暴力〉を主題として自由闊達な学術的討議を切り拓く場となる機はすでに熟しているように思われます。

特集論文は、「『教育哲学研究』第 132 号の原稿募集」における「主論文」として、「投稿要領」に基づいてご投稿ください。本学会内外で活発な思考と議論が展開されるよう、会員のみなさまの積極的なご応募をお待ちいたしております。

『教育哲学研究』編集委員会